

歴史的な眺め：「日本アルプス発祥の地」に登る

日本の近代的な登山は、明治時代（1868-1912）、ヨーロッパの登山家たちの訪れとともに中部山岳国立公園で始まりました。しかし、日本の他の地域と同様、これらの山々に登ることは、山岳をはじめとした自然現象を神格化する日本固有の宗教にルーツがあります。一部の地域は既に巡礼の地あるいは僧たちが厳しい修行を行う特別な場所となっていました。

北アルプスの主峰である槍ヶ岳の初登頂は、1828 年に播隆（ばんりゅう）という仏僧によって達成されました。山は修行僧に加えて木こりや猟師の領域でもあり、上條嘉門次（かみじょうかもんじ）という猟師は、今では 1877 年に日本人以外で初めて槍ヶ岳に登った登山家、ウィリアム・ゴーランドを山頂まで先導したことで知られています。ゴーランドはイギリス人の技師・考古学者で、明治時代に産業化を支援するために日本に招聘された数多くの外国人専門家のうちの一人でした。ゴーランドは熱心な登山家でもあり、「日本アルプス」という言葉は、ゴーランドが著作内で初めて使いました。

日本の山を世界に紹介したのは別の英国人登山家で、ウォルター・ウェストンという名の宣教師でした。ウェストンは、いくつもの北アルプスの山々に登った後、1896 年にロンドンで出版された『日本アルプスの登山と探検』という本を書きました。同胞であるゴーランド同様、ウェストンも嘉門次の先導で登山しており、この本の中で嘉門次を賞賛しています。

ヨーロッパの人々が登山技術と登山用具を国内に導入したため、登山は人気のあるアクティビティになっていきました。1905 年に日本山岳会が設立され、1915 年に慶応大学で日本初の大学登山部が創設されました。このスポーツは急速に全国に広がり、熱心な登山家達によって山に次ぐ山、ルートに次ぐルートが次々に踏破されました。今日、絶え間ない保全活動および登山道と山小屋の適切な運用のおかげで、登山家は無数の山に登ることができます。